

学生大使 実施報告書

氏名：大須賀颯

学部・学科（コース）・学年：人文社会科学部 人文社会科学科 グローバル・スタディーズ

派遣先大学：新モンゴル学園

派遣期間：2023/8/28～2023/9/11

1 日本語教室での活動内容

日本語学校では、主に日本の文化、特に山形県の様子や、日本語での会話で用いる語彙に関しての授業を行った。新モンゴル学園の学生は日本文化への関心が非常に高く、授業内容への質問も多く出る非常に活発な授業となった。また、日本への留学を志望する学生への面接練習・志望理由書添削などの講座も行った。現地学生、特に日本への留学を考える学生の日本語能力のレベルは総じてかなり高く、人種の系統の近さも相まって、ただ話すだけでは日本人と間違えるほどの現地学生も多かった。そのため、志望理由や面接練習では言葉を教えるというよりは、より高度な内容の、実践的な面接の対策を行った。例えば、面接の練習を行う中で、彼らが日本へ行って何を勉強するかイメージがあまりはっきりしていないという感想を持った。そのため、面接や志望書でより具体的な内容を書くようにするなどの指導を行った。また、日本人の面接官の印象に残る回答のコツについても教えた。

2 日本語教室以外での交流活動

学校以外の場で、現地学生とともに観光を行った。現地の博物館や、名所などを回ったり、草原へ行ったり、ウランバートル郊外の森林地帯でキャンプを行ったりした。モンゴルの自然に触れる一方で、その中で生きる彼らの自然に対する考え方などを知る機会もあった。そこでは彼らから聞いたモンゴルの良いところや悪いところ、日本の良いところや悪いところなどについて、率直な意見を交わした。彼らの正直な気持ちを知ることができたのは非常に有意義であったと感じる。また、ホームステイ先の家族の、工科大学生の男の子に現地の公園へ連れて行ってもらった。公園では新モンゴル学園外の一般の人々がおり、その人々とも会話した。新モンゴル学園の生徒の日本への興味の強さは言うまでもないが、一般のモンゴルの若者と会話する中で、彼ら・彼女らの日本への興味、特に漫画やアニメなどのサブカルチャーへの興味がとても強いことを実感した。現在のモンゴルは韓国の影響を強く受けていたが、日本文化も興味を持たれていると知れたことは興味深いと感じた。

3 参加目標への達成度と努力した内容

今回の参加する上での目標として、積極的に行動を起こすというのが目標だった。前回の渡航では、あまり自分から何か働きかけることがなく、後悔の残る結果となってしまった。そのため今回のモンゴルではぜひ自分から声を掛けていこうと考えていた。そのため、日本語教室や面接の練習など、現地学生向けの活動へ自分から声を掛けて参加を呼び掛けることを心掛けていた。また、現地学生以外にも、ホストファミリーに連れていかれた先での同年代の人々へ声を掛けるなどして、多くの人々と知り合うことができた。そのため、積極性という面では目標を達成できたと考える。もう一つの目標として、日本の文化を正しく、丁寧に伝えることを心掛けた。こちらも前回の渡航で課題だと感じた点であり、外国の人に日本のことについて聞かれたとき、自分もその日本のことについてよく知らないということに気が付くことが何度かあった。今回はそのような質問に答えられるようにと、自分でも意識して勉強し、臨んだ。実際にモンゴルでそのような日本のことを聞かれることが多くあり、その度になるべく丁寧に返すように心がけた。その中で、福島原発などのことについて聞かれることもあり、海外の関心がそこにも向けられているのかと改めて意識するようになった。

4 プログラムに参加した感想

私は今回が2度目の学生大使プログラムへの参加であったが、今回のプログラムは前回のものとはまた異なる活動の様子であったと感じた。まず、今回はホームステイ形式での滞在であったため、現地の生活をそのまま学ぶことができた。当たり前ではあるが、日本の常識が通用しない場面もあったため、対処すべき事象もあった。特にホストファミリーとの会話の場面では、会話に齟齬が生じることが多かった。私のホストファミリーは高齢の女性であり、日本語はもちろん、英語もあまり通じなかったため、ロシア語での会話が必要であった。私はロシア語専攻であったため、多少の会話はできたが、細かい部分は通じないことがあった。また、現地のロシア系住民の方と話す機会もあり、日本人と答えると驚かれたこともあった。私のロシア語は拙く、あまり高度な会話はできなかったが、そのようにロシア語話者と実際に会話するという体験ができたことは、今後の自分の学習への大きなモチベーションとなったと感じている。

ただし、今回は時間的な制約で学校の授業を見学する機会がなかったため、もし次回訪れる機会があるならば、もっと多くの学年の授業へ参加し、その様子を学んだり、逆に学生に対して授業を行ったりしたいと考える。また、日本へ留学するモンゴルの学生方に対して、日本で今後も彼ら・彼女らへ関わりたいと考えている。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

先ほども述べたように、今回の活動の中で少なからず自分の専攻するロシア語を用いたという体験は刺激となり、今後の語学勉強のモチベーションとなったと感じている。そのため、今後はさらにロシア語の勉強に励みたいと考えている。また、今回は新モンゴル学園の新学期と重なってしまったこともあって、あまり実際の学校の授業へ参加することができなかった。そのため、今後実施されるサマースクールなどの活動へ参加することで、もっとモンゴルの日本語授業へ関わることができるのではないかと考えている。また、彼らが日本に来てどのようなことを勉強したいと考えているのかについても今回知ることができたため、その助けになることもしたいと考えたため、日本へ来ている留学生と交流する活動へも参加したいと考えている。



チョイジン・ラマ寺院にて現地学生の方と

【学生大使 実施報告書】



日本語クラスの様子



日本語教室の様子